

時の在りか

伊藤智永

(第1土曜日掲載)

オバマ米大統領の原爆慰霊碑献花を広島市の平和記念公園で取材した松尾文夫さん(82)は、その1時間後、NHKラジオニュースに出演して感想を求められ

「残念ながら、オバマ氏からは特段の感慨も心の高ぶりも感じられなかった」

と話した。マスコミ・世論の歓迎ムードと二線を画す冷めた語り口が、耳の奥に残った。

元共同通信ワシントン支局長。日米はどんなに深い同盟国になっても心底理解し合えてはいない、戦争のけじめをつけていないから

だと思いつり、西国首脳が広島と真珠湾を互いに訪れる献花外交を提唱してきた功労者である。宿願の一方がかなって感無量のはず

が、老練なジャーナリストの目は、甘い感傷を返けた。

米大統領が初めて被爆地を訪れた意義の大きさは評価する。とはいえ、今回の訪問は退任を見据えたオバマ氏が、就任直後に核廃絶を劇的に掲げたプラハ演説(2009年)に締めくくりをつける

「政治的配慮の巧みな儀式」という面が強すぎた。格調高い

演説の相手は、日本や被爆者である前に、世界と米国民だった。

ただし、隣に並んだ安倍晋三首相が称賛の余得にあずかり、選挙前の公約違反に目をつむってもらおうとしたのに比べれば、オバマ氏の政治性は数段上質だった。

「もっと早く来ていれば」
そう松尾さんは残念がる。

米国は戦後50年ごろから、大統領の広島訪問を何度も前向きに検討した。実現しなかったのは、日本外務省の反対が理由の一つ

だ。

謝罪なきヒロシマ献花

だ。

匿名の投稿を募って米政府の内部文書などをインターネット上に公開している「ウィキリークス」は、09年に東京の米大使館が本国に送った外交文書で、数中三十二

外務事務次官がルース駐日大使(いずれも当時)に

「日本国民の期待を抑える必要がある。訪問は時期尚早だ」と主張していたと明かした。

日本政府は「不正な情報にはコメントも確認もしない」と無視したが、他に何人も米当局者や日本の軍縮専門外交官らが、外務省主流のアメリカンスクール系幹部たちは一貫して訪問に抵抗してきたと証言している。

嫌がるのは、答礼としての首相の真珠湾訪問が「謝罪」と受け取られたら、国内右派の反発を説得する自信がないからだそうだ。

謝罪を求めないことが、今回の「成功」の決め手とされる。それが成熟した品格ある憤みで、謝罪を求めるのは、かたくなな人たちと言わんばかりの空気である。

愛する子を一瞬の閃光と烈風で蒸発させ、骨も残さずこの世から消し去ったものを「許します」と

言う親がいるだろうか。怒りにもたどり着けず、ただ悲しみのふちに立ちつくす。それが謝罪を求めない心の境涯だろう。

マナーがエチケットの一種のようにならなれば、原初の悲しみに踏みとどまり、無言のままそこから一步も出まいと意志するの、また勇気である。そうした時、人は慰霊に鎮静する。

自分が「謝罪は要らない」と言える身か、自問する憤みがあれば、世論調査では「分らない・答えられない」を選ぶだろう。

まして、謝罪不要論が、日本がすべき謝罪もいがかげん免責してほしい思惑含みと勘繰られかねないなら、憤みとは無縁の打算と言われても釈明は難しい。



＝コラージュ・立川善哉

「国民感情は複雑だが、謝罪は求めないので訪問してほしい」
そう決断して交渉し、国内を説得するのは政治の責任である。政治家を氣遣う優しすぎる世論は、民主主義をふやかせせる。

戦後民主主義を代表する政治思想家、丸山真男は、陸軍2等兵として爆心地から5キロほどの広島市宇品の司令部で被爆したが、長く体験を語るなかった。

大学紛争で自らの戦後思想を否定された後、戦後24年目に初めて詳しく話し、広島を再訪したのは戦後32年目のことである。戦争体験が思想の土台だったのに、

「原爆体験は思想化していない。なぜできなかったか、なぜ来なかったか。自分でも分からない。終生、そうこしか語っていない。

被爆者手帳も申請しなかった。あれほど多弁・多作な人だからこそ、許されざることは語り得ないと思志していたのか。

語れないことを記憶し、継承し、思い出す。その不可能と矛盾を意識せずに、原爆の許しや和解を語らない。オバマ氏の献花は、その憤みを考えさせた。

編集委員。政治部、経済部、シユネープ特派員など。近著に「靖国と千鳥ヶ淵 A級戦犯合祀の黒幕にされた男(講談社)の文庫」